

## いろいろな顔が大集合 —長岡京の人面墨書土器—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



出土した人面墨書土器

怒った顔、泣いた顔、とりすました顔…多彩な表情のオンパレード。人面墨書土器とよばれる素焼きの土器の側面に墨書きされた古代人の顔である。その数約200。

これらが発見されたのは、京都市伏見区淀水垂町内の水田地帯の一面で、水垂遺跡にあたる。ここは今から約1200年前、わずかに10年間だけ置かれた都「長岡京」の東南部で、当時の呼び方では長岡京左京七条二坊と三坊である。

調査では、長岡京の東二坊大路と六条大路の交差点を発見した。東二坊大路は幅約25mの南北道路で平安京の西洞院大路にあたる。六条大路はいうまでもなく東西の

道路で、本来なら東二坊大路と同じ規模であるが、今回は幅約10mのいわゆる小路の規模で確認した。この2つの路の交差点には、北西から南東方向に横切る川が流れている。川幅は5～10m、深さ約1mである。川には橋が架けられ、水量調節のためのしがらみや護岸の杭列も見つかっている。橋脚は、幅2間(5.0m)長さ2間(5.4m)ある。人面墨書土器は、この川の橋から下流で多くが見つかっており、ちょうど流れに沿った状態で分布していた。川からは、他にも人形・土馬・模造した小型カマドなどの遺物が多く見つかっている。

人面墨書土器は大小の2種類が

認められ、大きいものは口径16cm・高さ8cm前後、小さいものは口径10cm・高さ4cm前後である。いずれも広口の壺形をしており、底の部分はわずかに平らで、胴の部分は内側にわずかに湾曲し、口縁の部分は外上方へ広がっている。全体の造りは粗く、粘土紐の巻き上げの痕跡が随所に認められるが、口縁の部分だけは、いずれもいねいに横なで調整されている。大型のものには底の部分に型作りの痕跡が認められるものがあり、また、体部には退化した一對の把手がつくものもある。これらとは別に土師師の甕をそのまま転用した人面墨書土器もある。



川の下流から橋を望む

奥のほうに橋脚の木材が見える。人面墨書土器などの遺物は橋から流されて川底に堆積した。遺物は接合・復元したもの。



長岡京と祭祀遺跡の位置

人面（顔）は土器を人の頭に見立てて、側面に筆で墨書きされている。顔は1つの土器に1～4面描かれており、2面のものが最も多い。また、顔とわからないものや、まったく描かれていないものもある。1つの土器に複数の顔がある場合は、ほぼ同じ顔が描かれている。表情は多彩で、怒ったり、泣いたりしているように見えるものがあり、風貌も髯面・垂れ目・団子鼻と同じ顔はほとんどない。筆使いも達筆でかなり絵心のあるものや子供のいたずら書きのように稚拙なものまで、千差万別である。しかし、よくみるとほとんどの顔には髯がみとめられ男性を描いていることがうかがえる。また、表情も怒りや悲しみなど概して暗い表情が多いようである。現在までの研究によって、この土器は穢れを祓うまつりに用いられたことがわかってきている。土器の中に自分の穢れを息とともに吹き込み、紙などで土器の口を封印し、それを川に流して穢れを祓うというような祭祀であったらしい。その際

に描かれる顔は線をなう本人を示すという説もあるが、疫病神を表しているという説もあり、土器に描かれた顔の表情をみるとうなづける一面もある。また、まつりには人面墨書土器だけでなく人形・斎串・土馬・小型カマドなどもあわせて用いており、遺物の種類や割合によって、まつりにいくつかのパターンが存在する可能性が指摘されている。

こうした祭祀遺物は平城京などの古代の都を中心に、南は九州の太宰府、北は東北の多賀城や胆沢城など広い範囲で見つっている。しかし、その多くは律令国家と密接に関連した遺跡であることから、これらの遺物を用いた祭祀も律令的な色彩の強いものと考えられよう。

長岡京においても京内やその周辺で、これまで多くの祭祀遺物が見つかり、祭祀が盛んに行なわれたことを物語っている。特に、京の西端にあたる右京七条四坊（西山田遺跡）や北東の外れの大藪遺跡では川の跡から大量の

祭祀遺物が見つかりしている。この2つの遺跡の位置をみると、西山田遺跡は今回の調査地のほぼ真西にあたり、大藪遺跡はほぼ真北にあたる。このことから、長岡京では京の周辺に祭場を計画的に配置している可能性が考えられる。

最後に、人面墨書土器が出土した川からは、延暦十年（791）三月十六日の日付が記された荷札木簡が出土しており、この祭祀が長岡京の時代に行なわれていたことを示す貴重な資料となっている。文献によると木簡の示す年の前年、延暦九年には長岡京内で痘瘡が大流行したことが伝えられている。今回発見した人面墨書土器をこの災厄と関連させて考えるのは早計であろうか。

ともあれこれらの土器を眺めるとき、得意気に巧みな筆さばきで顔を描く人、初めて筆を握り稚拙な筆を運ぶ人、そして、橋のたもとに集い敬虔な祈りを土器に託し川に流している当時の情景が目に見え浮かぶようである。